

『幕末の先覚者 赤松小三郎』（安藤優一郎著）紹介

上原 昇（2組）

上田藩士・赤松小三郎の評伝『幕末の先覚者 赤松小三郎』が上梓された。8月10日に平凡社新書として刊行された本著の副題は『議会政治を提唱した兵学者』、著者は安藤優一郎氏（千葉県生まれ、57歳）である。安藤氏は昨年12月、関東同窓会赤松研究会主催の講演会で『赤松小三郎と勝海舟』と題した話が好評だった。

その講演会で安藤氏は、「これまで赤松について特別の勉強をしてこなかったが、これを機に研究を深めていきたい」と述べていた。

それから約8ヵ月、読みやすい新書として1冊のまとまった形の本が世に出たことは、安藤氏の長年の研究蓄積と、赤松研究会の後押しが奏効したものと思う。

小三郎と上田藩、幕府、薩摩藩、会津藩との微妙な関係や、豊前中津藩下級藩士で同じ境遇の福沢諭吉との比較、実兄芦田柔太郎とのやりとりなどは興味深い。

安藤氏の著作は数多いが、昨年8月に本著と同じ平凡社新書として刊行された『越前福井藩主松平春嶽』も同時代を舞台にした作品で併せて読むことをお勧めしたい。

本著はドラマティックな時代小説と違い、史実に基づいた内容なので一般受けはしないかもしれないが、著者も「歴史教科書には記述されていない幕末史」と書いている通り、上田出身の人間としては読んでおきたい一作である。

また、あとがきには「上田高校関東同窓会内の組織である赤松小三郎研究会が啓蒙・研究活動を活発に展開している」と研究会にも触れている。

なお、今12月10日（土）に予定されている赤松研究会主催の講演会は東大名誉教授の三谷博氏を招いている。本著では参考文献として、三谷氏の『維新史再考』（赤松の評価に関する記述あり）を載せている。この講演会も楽しみである。

（2022年8月20日記）

